

みんなの語り 民放史

題字 中川 順

国際無線通信から転身して

民放開局に尽くした一技術者の回想

分^{わけ}部 芳雄 (TBS)

今回の民放史は、ラジオ東京(現TBS)初代送信所長だった分^{わけ}部さんに、戦前、戦中の国際無線電信電話、そして戦後の民放開局についてエンジニアの歩みをうかがいました。

インタビュ― 池田徹也、中村登紀夫(TBS)

— お幾つになられたんですか
89歳になるんですよ。

— お元気でですねえ

TBSの話になる前に私のエンジニアとしての歩みをお話ししましょう。昭和8年(1933)に日大の専門部電気工学科を出たんですけど、就職難でね。学校の推薦で東芝や海軍の技術研究所とか受けてもみんなダメだった。秋に今度はKDDの前身の国際無線電信の会社を学校から紹介されたんです。「新人で台湾に行く技術者が必要なんだ。台湾でもいいか」

「いいです」。それで半年くらい本社にいて台湾に赴任した。

日本海海戦で東郷さんが「敵艦

見ゆ」と打電したくらい当時の日本の通信は発達していた。あれは火花式高周波電流を起こしてたのね。ところが真空管式になると大電力送信真空管がなかなか出来なかった。僕が学校を出る頃やっと10kwの送信ができる真空管が出来て国際電話が無線で出来るようになった。それ以前は、長崎から海底ケーブルで山東半島、そこで地上に立ち上げ、モスクワ、独、仏

を通過してドーバー海峡を渡る経路なんで途中で全部モニターされてしまう。丁度、欧米に直接電話する通信基盤が出来た頃でした。



左、分^{わけ}部 芳雄さん

日米開戦、昭南島へ
阿波丸で帰国の筈が

13年に本社に帰り、2年後、当時日本で最大の無線局だった栃木県の小山送信所に移った。で、昭和16年に開戦。17年の秋に、今度はシンガポールに行くことになった。昭南島ですよ。もう民間人もたくさんいたが軍の通信は軍がやっている。僕らは民間人が日本や占領地域と電報や通信をする施設を運用してたんです。一応軍の囑託でした。

遠藤幸吉さん(ラジオ東京初代技術局長、常務取締役)は開戦前にサイゴンで南方軍司令部の通信顧問になっていた。軍属でね。

軍の嘱託っていうのは：笑い話だけど、飛行機に乗るのは将校が一番先、二番目が軍犬、軍馬、伝書鳩、次はP屋、判るでしょう、次が軍属、そして嘱託なんです。

最後が一般人。まあ最下級の待遇だったけど威張ってました。通信部隊参謀は神主の倅で、大学は文学部。大学出というだけで参謀なんだから、何も分らないんだ。だから部下の教育を頼まれてね。支社長は海軍少将でフランス大使館付の武官だったハイカラな人で、「分部君こういうことやりたいんだ」「やりましょう」で随分可愛がられて、他の人はサイパンだ、ジャワだと転勤したのに私はしなかった。ツイてたんだね。

19年に本社から帰ってこいつて命令があったけど交代がこない。そこへ、最後の帰還船といわれた阿波丸がきてね、「君、これが最後の機会だ」と言われて帰ることになったら、年輩の部下が病気になる。死ぬ前に家族に会いたい、必ず帰ってくるから代って下さい。

ああいよいよ。それが台湾沖で潜水艦に沈められた。今、芝の増上寺に犠牲者の名を刻んだ石碑があるけど、一歩間違えば、そこに分部と刻まれてるんだよね。

敗戦の日、支社に

送信所の現地人たちが来て

昭南島では現地の高校の一、二年生くらいの青年を採って半年間日本語を教えて、その後はみんなで手分けして技術を教えていた。

8月15日に、たまたま支社に出ていたら、午後、送信所の現地人の代表が来た。何だろうなと出たらいち早く日本の降伏を知っていて僕に挨拶したいって言うんだね、あなたには大変お世話になった。イギリス人だっていい人もいれば悪い人もいる。日本人もそうだ。でも一つだけ違う。日本人は僕らに仕事のやり方をただで教えてくれたけど英国人は謝礼を取った。私たちはあなたの方のお蔭で自分で出来ると自信がついた。心配ありません。一日も早く家族の許に帰ってくださって言うんだね。

昭南送信所は島の西南のゴム林の中にあって、僕は2年ほど社宅で彼らの家族とも一緒に暮らして

いた。誰か病気すると薬を飲ませたり、ビタミンの注射をうってあげる。栄養不足を補うために軍政鑑部から特別の配給もらって、月に一回くらいかな、職員や家族全員一緒にパーティもやった。まあ仲間なんだよ。それでお別れに来てくれたのかと嬉しかったねえ。

後は帰国することしか頭になかったけど連合軍に施設の引き継ぎが必要なんです。スイッチを入れれば通信できるようにして英軍に引き渡した。機材リストも作って。

牢獄へ、そして帰国

会社は、仕事はないよ

ところが引き継ぎ終わった途端に刑務所なんだよ。その頃は鳥居博さん(GHQ推薦の電波関係法令審議室主査。元ラジオ東京業務局次長)が支局長で、鳥居さん以下14人が牢屋に入れられた。容疑がさっぱり分からなかったけど、2ヶ月くらいで釈放されてね、石炭船で12月8日に日本に帰った。

それで本社に挨拶に行ったら、人事課長に呼ばれて「この会社はもう先がない。よそ行ってくれ」って。「何言うんだ。小山の所長が行ってくれと言うんで行っただ

だ。帰ってきた途端にやめろってなんだ」「じゃあどうするんだ」「小山送信所に帰る」。で、小山に行ったら、台湾に行けって言った上司が所長で、「やあご苦労だった。君ならウエルカムだ」。女の子だけで仕事ができないんだ。

民間放送に來ないか いやあ、今更中波なんて

昭和23年の始めですか、毎日新聞のラジオ準備室長は後の毎日社長の田中香苗さんだったけど、鳥居さんが主幹で、小山の送信所に來られた。「民間放送が出来る。手伝ってくれないか」「いやあ、僕は送信以外知らないし、出来ることがあるんですか」なんてやりとりした。

無線局の設計はシンガポールであちこちやったし、今更ラジオなんてという思いもあるし、上司に話したら、「手伝ってあげなさい。東京本社に転勤させるから」。それで単身赴任してね。毎日5時に勤務が終わると毎日新聞へ行ってお手伝いです。僕は送信所には溝の口を選んだ。南にサブスクライバーが多いからそっちに電波を強くしたらいいって。

送信設備の設計もして、機械の仕様書も作った時、南北朝鮮の情勢が緊張してきた。国際電気通信がビジイになってきたので、上司が「帰ってきてくれ」。それで田中さんに、「僕が生涯をかけた仕事で忙しくなってきたのでこれでやめさせて頂きます」。そう、三、四ヶ月いましたかね。



熱心に語る分部さん

民放はおもちゃ放送局とは なんだ、50kwで申請すべきだ

ラジオ東京は、元日商会頭で、初代社長の足立正さんが、50kwじゃなければ社長を引き受けないと主張して50kwになったんだけど、僕にもこんな話があるんですよ。

NHKの技術部長だったかな、『電波日本』という技術の雑誌に

『おもちゃ放送局』という題で、商業放送が話題になっているが、たかが10kw、NHKは100kwだ(第一放送は50kw)。10kwなんて《おもちゃ放送局》だと言っている。それで、田中さんに「失礼な記事です」と言ったんですよ。

CCIR(国際無線通信諮問委員会・世界中の電波の周波数を割り当ててくる国際機関)も東京地区に50kwのクリアチャンネル(世界の各地域の優先的チャンネル。混信を避けるため、その地域では他局は同一周波数を使用できない)を割り当てている。なのに誰も申請していない。だから向こうはバカにしている。ケシカラン記事です(当初経済効率がいいとの判断から、各社とも10kwで申請していた:「東京放送のあゆみ」)。CCIRが割り当てている950KCを申請すればNHKに失礼なことを言わないで済む。「そうか、分部君、反論を書いてくれ」。で、950KCを申請すれば50kwで放送出来るという反論書いたんです。

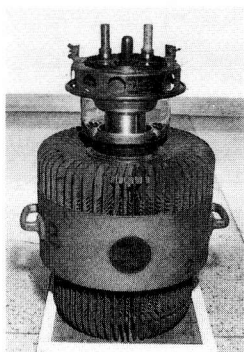
その後、足立さんが「50kwじゃなければ社長を引き受けない」って頑張った話を聞いたんだけどね。僕は技術者としての義務と正

義感から田中さんに申し上げたんだが、足立さんは経営者として判断されたんだね。

ついに口説かれてラジオ東京へ RCAの送信機が魅力だった

24年に茨城県の八俣送信所長になって、50kw送信機3台でNHKの海外放送や日米国際電話通信やなんか、技術的には非常に面白い仕事をしていた。ただね米国兵に監視されながらだったんです。

そして26年かな、遠藤さんが職場に見えて、「送信所長がいないんだよ。50kwの送信機を扱った人間が欲しい」。シンガポールでは、仕事上で遠藤さんと直接の関係はなかったけど、いろいろ指導される立場で人柄は存じあげていた。こりゃあ困ったな。何とか食えていたし、本心ではあまり興味が無いわけです。そしたら上司がね、「遠藤君知ってるんだらう」「え



RCA社製送信管

え尊敬しています」「何回も足を運んできている。彼には誰かつけてあげなければと思っている」。家内も東京に住めるんだからと言う。中波に落ちぶれるなんてやだなあ。って気持ちに変わりはなかったけど。ただRCAの送信機は魅力だった。しかも空冷で。われわれのやつは短波でも水冷、空冷なんです。ね。それ見るのも悪くないなあ。と決めたわけ。

それで実際に見てみると、違いますね。日本は20年は遅れていると思った。部品なんかでも日本では見られないものが沢山あった。8月頃、遠藤さんが来られたので、じゃあお世話になりますってラジオ東京にきたわけです。

50kw送信機は、空冷の真空管が秘密兵器の一つで海軍の許可がないと買えなかったのを、足立さんの関係で特別に許可をもらったんです。最初に来たものには予備管は付いていなかった。

遠藤さんには「君に送信所長をやってもらう、12月のクリスマスまでイブが開局だから頼む」って。

9月はじめに、まだ電通の中にあったラジオ東京本社で鹿倉専務(元毎日新聞社専務、TBS二代

目社長)に会ったんです。そしてね、「役人やった人間には会社勤めは大変だと思うよ」「いや私は一昨年までKDDという会社に勤めていて決して役人とは思っていません」「まあ一所懸命やってくれ、役所と違うから覚悟が要るよ」。ちよつと頭に來たんです。ね。顔見たってムツツリであれでしょう。後でそれが魅力なんだと分かったんだけど。

君、戸田のアンテナは 50kwには使えないよ

それで遠藤さんの部屋に行ったら、元NHKの技術局長という人がいて、突然、「君、送信所長やるんだって」「そう言われています」「戸田の送信所のアンテナは50kwでは使えませんよ」って言うんだよね。ある新聞の電波準備室顧問だった人だね。ラジオ東京設立の中心になった4社(朝日、毎日、読売の各新聞社と電通)の準備室からは立派な技術者が来ている筈だ、それなのにこんな重大なことを口にするのは、ひよつとすると僕の技術力を試すつもりかなあなんて、ちよつと慥然としたけれど、まあ、現物をみてから対策

を考えようと思つて一礼して部屋を出たんですよ。

戸田送信所には9月5日に行きました。バスを降りて迎りを見渡すと、荒川の河川敷で、隣はボートコース。20年もジャングルや森林や雑木林の中で仕事してきたから、長年灯台守のような生活をさせてきた家内や子供たちにやつと普通の暮らしをさせることが出来るかなとほっとしたのも実感ですね。

局舎は50%、送信機器は10%ほど到着していて、アンテナ関係は着工開始という状況でね、イブに開局するのは容易じゃないと思つた。私が送信所の設備配置図や放送機の説明書類を見たのは初めてだった。信じられる？。

―期待のRCA送信機の装備や性能はどうでした。

超高級車だね。音の切れ味のよさは最高。計器も見やすく、扱つてみてなにより有り難かつたのは塗装やメッキの技術がシッカリしているのか、剥げ、汚れ、変色がない。自動車産業の伝統があるからだと感じたなあ。

送信所の一同は自分の車を手入れするようにメンテナンスをして

くれましたよ。後の話になるけど42年には、運転時間が10万時間を突破した送信機はRCAの歴史にないということでTBSに感謝状が贈られた。オペレーション・エンジニアには最高の賛辞です。

しかし、大電力送信機に共通の悩み、突然異常な電流がながれてオーバーリレーが働いて止まってしまう事故なんだけど、これには4年ほど苦しんだね。

組み立て、調整をやつてくれた東芝の技師は、僕らと一緒に本当に一生懸命やつてくれた。最初の設計者じゃないと勘どころを掴みにくい現象なんので、放送開始から4年間くらいは瞬間停波がしばしば発生して、新聞に「お詫び放送局」なんて揶揄され、皆、悔しい思いもしましたね。

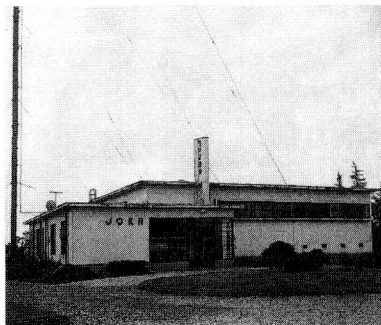
―ところで、例のアンテナは？

結果的に言えば使つたんです。放送波長に対して塔の高さが短く塔体の直径も細くて電波の放射効率は良くないけど、その分を送信電力を上げて補えば規定の電波を放射できると考えての決断です。

あのが意外な障害が発生した。あのアンテナは大電力で使う時に落雷に弱いんです。NHKでは

大阪局でタワーアンテナ型を採用していたけど、支線碍子が空中雷で容易にスパークするので対策に苦労していたらしい。私のように短波の指向性アンテナを扱っていた人間は知らない現象だった。

12月になって放送機とアンテナをつないで試験放送を開始して、しばらく後に突然、放送機が異常音を発して停止した。KDDの50kw機で海外放送を送信している時の落雷事故を思い出して、外に出てアンテナを見ながら送信機をオンさせると数秒後に最高部の支線碍子が落雷現象のようにスパークする。タワーアンテナには塔の下部に避雷装置が付けてあるのに、なんで最高部の碍子に放電するのか、空中線工学の権威にお聞きし



初期の戸田送信所

ても、NHKが研究をしているとしか分らない。それで家にある戦前の文献を漁っていると「碍子に避雷針をつけたら」というヒントが浮かんだんです。それを東北大学の内田教授に相談したら、「面白い考えです。教室で実験してみますよ」って言って下さった。その結果が「GO!」。で、メーカーと相談して、数年後に完成したんです。昭和45年、この《タワーアンテナ避雷装置の考案》で、私たちのグループが民放祭賞を頂いたので。

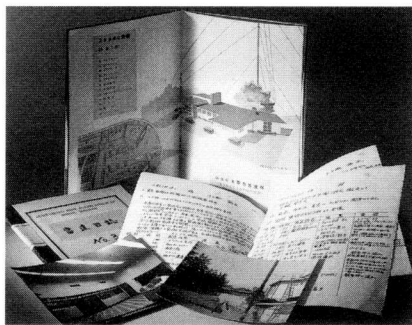
開局前夜祭、頭狂いそうだった

まあよく出来たもんだ

そうして12月24日の開局前夜祭を迎えるわけです。送信所のコントロールデスクにみんな座って、一人ずつ送信機の緊急リカバリボタンに所に交代で立って。ただ、アンテナが故障したらどうしようと思ったけど、そんなことをしたら頭狂いそうだった。

僕はまあ送信所の一部署だったけど、ラジオ東京総体が、失礼な言い方だけど、全員が放送には素人ですよ。制作も、編成も、よくやったなあ、それが僕の気持ちで

すよ。若かったこともある。技術陣にしても、本当に専門家と言うとね、この会社に来てから専門家になったという人が大部分ですよ。私が入るときでも、先輩が、「よせよせ、聴取料をとるNHKがある。商業放送なんて成り立つ



戸田送信所の当直日記

はずがないぞ」だった。今でいうベンチャー企業だったんだね。

僕は開局ってのは何回もやっているんですよ。そうすると互いに送信所の連中がお祝いメッセージを送り合う。だけどラジオの場合、じかに近所の人からも「おめでとう」なんだ。これが違うんだよ。一般の人から喜ばれる仕事をしたのは初めてだったからね。

僕は昔、一日にバスが二往復な

んていう送信所で働いていた時、ラジオを聞くのが楽しかった。それが、自分がやるようになったら苦しみだけで、楽しくなくなっちゃった。送信機はいつ止まるかわからないんだよ。

嬉しい余談

昭和島時代の青年が訪日して

余談だけど、僕がシンガポールで教えた青年たちがいましたね。その一人が、昭和40年代の半ばでしたか、東京に来て、私がラジオ局長の時かな、帝国ホテルに呼ばれた。マレーシアの大臣になっていてね。「分部さんのおかげで、こんな身分になった。何エーカーの土地も持って、車も三台持ってます」って言うんだよ。で、分部先生は車は何台お持ちですかって聞かれて、ウン、私は自転車を二台持ってるなんて話をしたことがある。懐かしいですねえ。

分部芳雄氏

国際電気通信からラジオ東京へ。初代送信部長、TBSラジオ営業局長、ラジオ局長、取締役。

写真提供・TBS